

史話

浪漫主義的國家學の史的發展 (一)

十河 佑貞

十八世紀の末期から十九世紀の初頭にかけて、ヨーロッパに於いては思想上の一大回轉を生じた。勿論これはフランス大革命、其れに續くナポレオン戦争を裏書きするものである。

ローマン主義の風潮も、また時代の背景や其の時代人物に關する精細なる社會的境遇を度外視しては、到底之が確乎なる歴史的斷案を下すわけには行かない、さりながら斯る意味の思想的的研究は決して容易なことでは無い。茲に譯出したる論文は、バクサ博士の「ローマン主義的國家學への入門」(Dr. Fuxa, Einführung in die romantische Staatswissenschaft, Jena 1923) の一節で、獨逸ローマン主義的發展の徑路を叙述したものである。もとより時代の研究よりも學說的發展を

系統づけようと力めてあるが、しかし容易に根本資料を讀破し、且つ理解できない吾々に取りては確かに好個の入門書たるを失はないと思ふ。(譯者)

一、啓蒙思想

數ある社會學的歴史作物に於いて、自由主義と社會主義との理論の叙述されてあるものうちに破綻がある、即ち其の主要なる代表者を選び出すならば、アダム・スミスとカール・マルクスで、その間に未だ讀者の誰れもが更に氣づかなかつた缺陷がある。それは是迄人々が餘りに注意を拂はなかつた所であるが、兩者の所謂宏壯なる學問の殿堂の中に竄入してある理念の方向(Doorrichtung)に基くのである。今日まで、哲學と藝術

とに於いて、獨逸ローマン主義の社會學的學說が卓越せる意義を有することは夙に認められてはゐるが、社會學の方ではこの理念は繼子とも謂ふべきもので、之がドイツ精神の豊富なる源泉に根ざしてあるにも拘らず、未だ知られて居らなかつたのである。ところが又た近々十年のうちにこゝにも確かに一つ注目すべき變動が生ずるに至つた。殊にローマン主義的社會學並びに經濟學の主要なる代表者たるアダム・ミュラーは早くこの點について力説したのであるが、この著作は從來大學や宮廷の圖書館の中に潜在して居つて、永い間、全く「眠れる美人」として其の幸福を保つて來たものである。然るに今之が新たに再版を見るに至つたのである。凡そローマン主義の社會學の見解の發生を探究し、而かして其の盛衰を觀察する爲に、自然ローマン主義其物を十分に潰漏なく掘提することが必要である。其れに就ては、此れまでに多くの研究がないでなく、自分の現在著述も、大事業の礎石たるに過ぎない。蓋し、かゝる大事業は長い時代の後、今日の凡ての非常に得難い資料の根本的科學研究の後に初めて建設し得られべきものと思ふ。

ローマン主義の本質に精通せんかためには、豫じめこの與へられた目標に到達する爲に吾々が打込んで懸らなければなら

ない方向を統一する必要がある。ローマン主義的國家學といふものを一個の體系として叙述するのは甚だ困難である。何となればローマン主義の主たる缺點としては或る確乎たる體系を具して居らない憾みがあり、加ふるに、ローマン主義は統一的方向を現示しないで、極めて顯著なる發展を達成したものであるから、その理論の成立や發達に關する歴史的叙述のみが全く之に役立つ事となるのである。かくてローマン主義は斯る歴史的叙述の範圍内に於いて常に體系的觀點に向つて前進することが出来るであらう。しかし吾々は歴史的考察にとりかゝるとすると、ローマン主義の見解の發生のすぐ以前に勢威を振つてゐた理論や、その没落以後に再び優越になつた理論なぞを、簡潔に、而も其の本質的衝動にまで立ち入つて考察し、其れらのものと接觸することが限りなく必要であると云ふことである。

十八世紀の始めに於いては、國家學や社會學は全く「自然法」の理論の權内に在つた。自然法の理論と云ふのは、國家形成以前の自然狀態、その自然狀態に於ける國家以外の權力、進んでは國家の契約的基礎を説くものである。之は數世紀の昔すでに希臘のソフィストに依つて唱導せられ、中世紀に於ても知られ

ないでも無かつたが、英國の經驗論者ジョン・ロックの哲學に於いて特に明らかに自然法なるものが證明せらるゝに至つたのである。かのモンテスキューの著者「法の精神」(一七四八年)は正しくロックに負ふものである。此書は最善の國憲を發見しようとする目的に應命になつてゐるものであつて、この國憲によつて少なくとも個人の自由と云ふものを探知するに至つた。

彼は其最世界に有名になつた第十一卷の第六章に於いて(それは然かし尙ほ英國の憲法を只だ外見的に取扱つてゐる)君權、上下二院制、陪審裁判所等の三權分立を有する所謂立憲的王國の理想を描いてゐる。此の理想こそは、一九八九年から最近世に至るまで、近代の諸王國をしてその憲法の實現に努力せしめたものである。モンテスキューの國家學は所詮個人主義的である。それ故に上述せし如く、一切の彼の思想が向つてゐる究局の目的は、公民各自の政治的自由に外ならない。そこに彼は、公民各自が有する安全といふ靜穩なる意識を想像してゐるのである。彼は公民を愛護するために、相互に拘束し合ひ、且つ監視すべき立法的には完全であり、司法的には統一されたる國權の分立を専制君主の手中から要求してゐる。本來モンテスキューは英國の事情を誤解して解釋し全く純粹なる概念からして斯

くの如き學說に到達したわけである、彼は全く後ちのデイドロ、ダランベール並びに其の他の唯物論者によつて稱揚された啓蒙主義、即ちかの人は「理性」に依つて一切を認識するこゝとが出来、また理性の力を藉りて一切のことを成すことが出来ると説く哲學的傾向の勢力の下にあつた。

十八世紀の第二の偉大なる社會哲學者たるジャン・ジャック・ルソーも亦た、同様の哲學的原則を是認してゐる。彼によれば自然法の學說は謂はゞ既に明らかにされたる純粹文化として了解された。彼の著「民約論」の中には國家といふものを一の綜合されたる社會形式として組み立てゝ居り、さうして或る契約によつて、個々人は理性に基づいて彼等の生存を主張する目的に向はなければならぬと定めてゐる。即ち既に人間が自然狀態に於いて生れながらにして有せし自由や平等の權利は、國家の契約が其れらを拘束しない限り尊重しなければならぬと云ふのである。それ故に國家的機能の實行といふ事は、本來すべての公民が關係を持つものであり、其れが全體として主權を有する人民を構成するものである。殊に之が法律の發布に關して相協力しなければならぬ。之は法律といふものが個人の意思に對して一般の意思を體現すると共に、之が一般意思の表現に外なら

依つて取り除かるゝに至つた。

ぬからである。しかし尙ほ此の一般意思は投票によつて定められ、且つ多數者の勝利によつて決定せらるゝべきである。之についてルソーはモンテスキューの説に鋭く反抗して居る。即ち彼は立法權が選ばれたる人民の代表者の手中に在るといふモンテスキューの代議制國家の説には賛同できなかつた。ルソーの見解では代議制といふものは彼等委任の繼續期間内は人民を抑壓すると云ふのであり、彼は代議制をば全く直接に民主政治に追従するものであると認めてゐるのである。同様に彼は權利の分立に關する學說を攻撃した。ルソーに従へば、國家の至上權は分立されてはあけないといふのである。ルソーは又た社會形式といふものを徹底的に原子論的に、個人の側から觀察し、中世以來根を下ろして來た組合の如き封建的奉仕關係といふやうな條件をば最も熱烈に攻撃した。國家の權力は統一的のものであり、且つ不可分立のものでなければならぬ。即ち聊かたりとも國家の中に國家のあることを許さないのである。

モンテスキューとルソーの學說は、フランス革命によつて勝利に到達した。「自由と平等」の標語の下に、専制主義的國家は破碎せられ、昔ながらの中世的存続國家の殘物は殆ど一撃に

この二人のフランス哲學者は、先づ第一に「國家的社會的生活の根本的變革の上に効果を及ぼした。それに反して「經濟生活は、かの著名なる蘇格蘭人アダム・スミスと彼の學派によつて改革され。彼の學派の者は彼等の師匠によつて主張されたる經濟的根本法の勝利を全うせしめた。アダム・スミスも亦た自然法の追従者であり、自然法は彼に在つては「自由と財産」といふ公式の中に把握されたる觀があつた。アダム・スミスは彼の經濟生活の敘述によつて、同様に個人の欲求とから出發して居る。彼の經濟的行爲はより高い秩序の中に適應するものではなくして、全く各人の個性に基づいた固定したる利己主義といふものが基礎となつて居る。個人の私的經濟範圍のうちに種なる横柄な「侵害」が現れた場合には、徹底的に之れを苛責しなければならぬ。若しも國家が、内に在つては權利を擁護し、外に向つては明らかに安全といふ保證を立て、さうして尙ほ先づ一般に一個人では經營することゝ出来ない確實にして重要な公益ある造營物(市街、學校等)といふものに意を用ふるならば非常に結構であるが、職業團體や組合に依る經濟生活の種々なる國家的又たは州會的の結合はとくに生産を妨止

し害毒を及ぼすもので、總て商工業の上に於いては何處までも自由といふものが尊重されなければならず、若し各個人をして懸命に働かしむれば既に毫も損害を蒙らないと云ふことを悟るであらう。アダム、スミスの主眼點は、分勞の現象によつて、根本的に財物生産の繁殖を促進することに在り、其れが國民の財産や安寧の資源である。出來得るだけ生産を奨勵し、出來得るだけ消費を節減することは、經濟の「純益」を齎らし、國富に對して尺度をあたへることになる。この最後のものは、個々の購入者の全生産過剰の殘餘によつて機械的に確かめられてあらう。

もし吾々がモンテスキュー・ルソー・スミス等の理論から、完全とその根本思想を摘出しようとするならば、三者は全く自主的個性から個人といふものに立つて、社會的及び經濟的現象の觀察にまで接近してゐる事を、容易に認めることが出来る。モンテスキューは個人の安寧を維持せんとし、ルソーは個人の自由と凡べてのものゝ平等を、而して最後にアダムスミスは、少なくとも國家的側面から、是れに束縛されることなくして、經濟的に無制限に生き伸び得る個人の自由を維持せんと欲したのである。此れらの英佛精神の學説はドイツに侵入し、さうし

て此處で哲學的に受け入れられて再建されたのである。

たしかにドイツの同時代の大哲學者イマヌエル・カントは、彼の國家學に於いて、英佛思想の所産に對して決して卓出して居ると言へなかつた。然かり、彼は「純粹理性の批判」の完成的創造者として幾様にも考へられるであらうけれども、彼の最も内面的思想は尙ほ啓蒙期に屬して居つたのである。彼はルソーの如く自然狀態に於ける人權の存在を確信し、且つ國家のある契約的基礎を認めてゐる。然しカントは純粹の民主政治に對してはルソーの靈感を斥けて居る。彼はモンテスキューの如く三權分立に従つた。そして再びルソーの公民の標徴としての「自由と平等」の概念を受け入れたが、徹底的に革命主義のヤコビン黨を擯斥して居る。しかし又た彼は革命の勢力が正當に行はれ、また訓練と秩序とが維持され得るかぎりに於いては、革命の勢力によつて權力を獲たる管理を是認した。けれどもフリードリッヒ・シュレーゲルの青年期の國家學的著書の審査からカントの國家學の上に立ち返へなければならない場合が生ずるであらう。

社會に對する基本的成就は啓蒙哲學者のイマヌエル・カントでは無くして、彼れの學派に屬し、而かもローマン主義の哲學

者たるヨハン・ゴットフリート・フイヒテに依つて開拓せられたものである。とは云へ吾々は此れらのものに没頭する前に、理念方向より吾々のローマン主義の瞥見に轉する必要がある。

一、ローマン主義の誕生

ローマン主義は單に藝術方面のみならず、世界と人生とを解釋してゐる思潮たることは勿論である。而してローマン主義的潮流は、多少に拘らず明白に、而かも多種なる名稱の下に、すべての世紀、あらゆる文化のうちに現はれてゐる、殊に十八世紀の同轉期に於けるドイツ浪漫主義は此れら一切の不可思議なる資料の集合せる泉である。直くその前に起つた啓蒙思想は、ローマン主義の源流とも見るべきもので、一つの人生解釋であるが、啓蒙思想は、如何なることに於いても「理性」を——唯物論的に箝め込んだ——「最上の法則」としてゐるものであり、ローマン主義は殊に理性に從屬しながら、而かも尙ほ生命の感動をつげてゐるものである。即ち、理性が求むる積極的な認識からではなく、むしろその内に潜んでゐる懷疑的な力を以て、謬まれる表象や偏見を破碎せんとするものである。カントの著作によりて考へれば、ローマン主義者とは最も批判的な

る精神を有する者であつて、而かも亦た實在の意義や目的に向つて絶えざる疑惑に苦惱する夢想家である。カント哲學の所産たる吾々に秘められてゐる「物自體」の本體といふものは、フアウストが「世界を奥の奥で率き統べてゐるもの何か」と云ふことを認識せんとするか如き、已むなき知識欲を満足させるものでは無かつた。如何にしてフアウストは、理性と合理主義とから轉化して、さうして遂に魔術に降伏したか。凡そ人生に對し純粹の概念構成的解釋の立場を取れば形而上學に赴き、機械論的な原子論的な立場を取れば統一と全體との爲に努力をしなければならぬことになる。古い神秘の泉が再び流れ初め、

有限的なるものを大膽に棄て去り、そしてローマン主義者は無限的なものゝ中に神と世界との合致を感じる。たゞ暗黒な時に、彼の魂の疑惑、すなはち懷疑の念が啓蒙思想の遺産を侵蝕し、さうして無限的全體の美しい夢を破るのである。ローマン主義の廣汎なる發達は、實際に於いて有限的若しくは無限的神秘から、確乎たる信條によつて束縛されてゐるものまで及んだのであり、後に至つては、合理主義の殘餘物や懷疑の襲來は是は殆ど絶滅するに至つた。つまり「信仰」が「疑惑」と「知識」とに打ち克つたのであり、福音がカントの「純粹理性の批

判」に打ち克つたのである。ファウストが昇天したやうに、ローマン主義は加持力教會に入り込んだ。即ち哲學的方向から轉じて宗教的運動に向ふようになったのである。

理性から形而上學へ、そして形而上學から宗教へと云ふやうな斯かる一般的变化は、殊にローマン主義的國家學の發達に對しても、又た時代によつて社會の本質を色々に判斷する上に於いても、常に根本的勢力を有してゐるものである。それ故に吾々はローマン主義 Die Romantik を三階段に分けることにしよう。

- (一) ローマン主義以前、啓蒙思想がやはり隨所に生き生きとしてゐるローマン主義の誕生期。
- (二) ローマン主義の初期、汎神論的哲學が優越を極めてゐる汎神論的階段。
- (三) ローマン主義の後期、ローマン主義的思集の中軸たる宗教が哲學を立場としてゐる神學的、加持力教的階段である。

ローマン主義の本質と生成と關する短かき成就に對して、吾々は其の唯一の開拓者たる哲學者ヨハン・ゴットフリプ・フイヒテ (Johann Gottlieb Fichte) と彼の社會的理論とを考へ

たいと思ふ。吾々は一般にフイヒテがローマン主義者に數へられてゐない事を熟知して居るが、然し彼の精神的成就はローマン主義的社會學に取つては重要なものであつた。フイヒテの學說を外にしてはローマン主義的社會學といふものを考へられないのである。それ故にこの卓越せる影響は適當なる方法を以て觀察されなければならぬ。